

# 断崖絶壁 大力作戦



目もくらむ岩壁にへばりつき  
作業する建設機械。その名も  
「ロッククライミングマシン」  
が苛酷な現場で岩を崩したり  
削ったりできるわけとは。

崖を見上げると、ハラハラする高さで大自然を前に奮闘中のRCM。

上部を水平状態に保つリフティング装置の仕組みがよくわかる。



ガラガラガラ……。時折、崖の上からかなり大きい岩が落ちてくる。ヘルメットは必ず着用。



# オ

ンリーワン企業の典型というべきだろうか。「高所法面施工」つまり、急斜面での工事に圧倒的な強みを持つ「大昌建設」。1982年創業で、本社は千葉県茂原市にある。

だが、活躍の場は関東周辺にとどまらず日本全国に広がる。その特色は人里離れた僻地の、通常の重機では這い上がることもすらないような場所でも、自社開発した「ロッククライミングマシン」(RCM)で登って工事ができることだ。

岡山県津山市の中心部から車で50分ほど北上したところにある現場を訪ねてみた。曲がりくねった細い道を辿って行き着いた先は、峻険な山々に

に囲まれた傾斜地。30度くらいはあるだろうか。

そして、そのはるか上の方、ほとんど垂直ではないかと思える崖では、青いRCMが作業中。アームを回転させ、土砂や岩を取り除く姿は「機動

## 断崖絶壁 ガリガリ 大作戦

急斜面を切り開くRCM。落石や崩落のおそれのある現場では、ラジコンによる遠隔操作で工事を行う。



戦士」のようで、遠くから見上げていてもほればれする。現場よりも高い場所にある立木を利用してアンカー(杭)を設置し、アンカーとRCMを頑丈なワイヤーロープで繋ぐことで工事が可能になるのだとか。

RCMがこんな苛酷な現場で活躍できる理由については、大昌建設広報の平島健一氏はこう語る。

「運転席やエンジンなどで構成された上部旋回体は、リフティング装置を操作することによって、常に水平な状態を保つことができます。弊社社長の岡本俊仁が1991年に開発したのですが、こうすることで、工事中にエンジンにかかる負荷を軽減できるので

なるほど、急斜面でも車体上部をつっかえ棒のように油圧シリンダーで持ち上げて、運転者と動力系に負担がかからないよう、いつも水平を保っているのだ。RCM、見た目はゴツイけど、仕組みは意外と繊細。それが他の重機に比べて実力が飛び抜けている理由なのかもしれない。



千葉県にある関連会社の「マシーン商会」はRCMの設計・製作・修理を行っている。ここには大中小さまざまなRCMが置かれている。